

私の履歴書

釜本 邦茂

⑧

東南アジア遠征のゴールラッシュが効いたのか。1964年4月から東京五輪代表候補による最終合宿を行うと通知が来た。四十数人の選手を3カ月間にわたって拘束、ふるいにかける。昨年、ラグビーのワールドカップで大奮戦した「エディー・ジャパン」のような強化の方法だった。

光夫両先輩はポジション柄、空中戦は不可避だから連日連夜、このペンデルで鍛えられ

3カ月間 怒とつの特訓

欧州遠征後 五輪代表に選出

全選手が千葉県検見川の東大グラウンドの寮で寝泊まりした。午前中はそれぞれ所属の会社や大学に通い、夕食を挟んで午後と夜間に練習がある。私は岡野俊一郎コーチにつきっきりでしごかれた。

内容は基本の繰り返し。Pマーク付近でゴールに背を

たま頭でたたいたのがペンデルボールだ。体育館の屋根からヒモでつるし、ブランコのようにスイングさせたボールをミートする。ヒモで高さを

私とCBの小城得達、鎌田

変え、自分の最高到達点でたたくように調節もできた。

きたが、岡野さんは「一つじや相手にすぐに覚えられる。左足でも打てるようになれ」

と促す。中学の数学の先生が右手と同じように左手でも図が描けるのを思い出し、左足に神経を通わせようと左手で

ご飯を食べることもした。ヘディングの練習も徹底された。高く跳べば邪魔者がいない空中戦の魅力に早大入学生、私も目覚めていた。しこ

合宿最終日には炎天下の60分ハーフの紅白戦で尻の穴が開くような極限の疲労を味わった。ミーティングで夏季遠征で欧州に行く者とマレーシアに行く者との振り分けが発

表された。東京五輪に出られるのは欧州遠征組。その最後



日本代表を見守る岡野さん④

私は7月24日のロシア共和国選抜戦から11試合連続フル出場、9月8日のスイス・グラスホッパーとの最終戦でゴールも決めた。7月28日、ボルゴグラードでのソ連選抜戦でFWの渡辺正さんがケガをした時、渡辺さんには申し訳ないが、自分の手のひらにチャンスが載っ

に「釜本」と呼ばれた。落選した先輩たちの胸中を思い、叫ぶのを懸命にこらえた。

欧州遠征は7月17日に横浜

を出航。カーテンを開けたら船窓から波が上下しているのが見えた。メシの時間にドラが鳴り、食堂に行っても重油の匂いと揺れで喉を通らな

たと思った。

欧州から帰国してすぐの9月12日、五輪代表が発表された。総勢19人。学生は杉山隆一(明大)、小城(中大)、横山謙三(立大)、森孝慈(早大)、山口芳忠(中大)、そして私の6人だった。(日本サッカー協会顧問)